

2023年度  
成城大学文芸学部  
芸術学科  
卒業論文作成要項

- この要項は芸術学科の卒業論文に特有の条件や推奨する形式について記述したものである。
- 今年度はすべてWebでの提出となる可能性があるので今後の連絡に注意すること。
- 口頭試問には、自分が参照するための卒業論文1部を必ず持参すること（Zoomになった場合は、手元で見ることができるようにしておく）。
- 卒業論文の提出方法、副本と要旨については別に連絡する。

# 成城大学文芸学部

## 芸術学科卒業論文作成要項

2023年9月15日改訂

芸術学科 喜多崎 親

### 1. 論文および用紙

- ・ワープロを使用する（別紙1参照）。手書きの場合はやむを得ない場合のみ、指導教員に理由を述べて許可を得る。
- ・ワープロで出ない文字の場合は空けておき、プリントアウトしたものに手書きで追加する。
- ・字数 20,000 字（400 字詰め原稿用紙で 50 枚）以上。図版、付録資料などは含まない。
- ・図版は本文中に組み込むことを推奨するが（別ファイルの論文レイアウト見本参照）、本文の後にまとめること、また別冊で図版集・資料などをつけることを認める。またそのために光沢紙など他の用紙を用いてもよいが、本文用紙と同じ大きさにすること。

※Web 提出の場合は、プリントアウトせずに PDF 化する。手書き文字を含む場合は、一度プリントアウトして手書きで記入したのちに、改めてスキャンする。

### 2. 用語、用字、用具

- ・本文は原則として日本語で執筆する。
- ・縦書き横書きは自由であるが、欧文表記が多い場合には横書きが望ましい。
- ・日本語は常用漢字、現代仮名づかいの使用を原則とするが、人名、原語、引用文、特殊語については、その限りではない。
- ・数字は原則として縦書き横書きの書式に従う。年代は西暦を用い、日本美術の場合は（ ）内に元号を併記するのが望ましい。

例 1. 横書きの場合 1900（明治 33）年

例 2. 縦書きの場合 一九〇〇（明治三三）年

- ・文字の印字は黒とする。手書きの場合は、黒あるいは青の万年筆またはボールペンを用いる。

### 3. 製本および表紙（Web 提出の場合は扉以外は不要）

- ・黒表紙（学内売店にて販売）をつけて、ひもで綴る。
- ・ワープロ使用の場合は縦書きでも折らずに綴る。手書きで縦書きの場合に限り 2 つ折にして綴る。
- ・表紙には、以下の項目を記入する。
  - ② 卒業年度
  - ② 所属ゼミ名（例：美学、津上英輔ゼミナール）
  - ③ 題目（提出済のもの）

- ④副題（なくても可）
  - ⑤学部、学年、組、学籍番号、クラス番号、氏名
  - ⑥別冊がある場合は、本冊表紙に（別冊あり）と明記し、別冊表紙には本冊同様に題目などの事項を記入して、図版、〇〇資料、註（注）など必要な事項を記す。
- ・扉頁（1頁目、中表紙）にも表紙と同じ事項を記入する。

#### 4. 論文本体

次の順序に従って書式を整える。

- ② 表紙：「3. 製本および表紙」参照（Web提出の場合は不要）。
- ② 扉：「3. 製本および表紙」参照（Web提出はこれが表紙の代わりとなる）。
- ③ 前書き：必要に応じて。なくてもよい。
- ④ 目次：章・節の頁まで入れること。  
※頁は扉から最後の頁まで通し番号でつける。
- ⑤ 凡例：出典の略記法、カッコの意味など、必要に応じてつける。
- ⑥ 本文：章立ては自由だが、必ず結論まで書く。
- ⑦ 註：なるべく脚註（同頁内）にする。後註としてまとめても可だが、章末ごとは不可。  
番号は通しにする。
- ⑧ あとがき：結論以外に必要なに応じて。なくてもよい。
- ⑨ 参考文献一覧
- ⑩図版一覧、付録など：必要に応じてつける。

#### 5. 出典、引用

- ・他人の学説、著書、論文、講義内容などを引用したり、その内容に言及したりする場合には、必ず自説と区別した上、註（注）により出典を明記する。出典文献名は註で引用頁も併記して正確に記すこと（別紙2参照）。
- ・外国語の文献から自分で引用翻訳した場合には、かならずその部分の原文を添える。
- ・本文中で引用、言及、参考にした文献、図版などはすべて参考文献一覧に挙げる。並べ方は、著者名の五十音順（欧文の場合はアルファベット順）が基本だが、展覧会カタログはそれだけ別に分け、開催年順とする。
- ・引用文が数行に亘る場合は、「 」をつけず、引用文の前後を1行ずつ空け、全体を2字分下げるのが望ましい。

#### 6. カッコの使い分け

- ・「 」 引用、強調、記事・論文・章名、シリーズ名
- ・『 』 書名、雑誌名、戯曲名、映画名
- ・《 》 美術作品名、音楽作品名
- ・（ ） 補足、言い換え
- ・[ ] 引用文中の論文執筆者のコメント等

※一般に「」は「」で引用した文中では『』とするが、特に表題などでは混乱を招くので、もとのままにすることも多い。指導教員の指示に従うこと。

※それぞれの分野での慣習もあるので、上記以外の使用法は指導教員に従うこと。

※その他のカッコはなるべく避け、必要な場合は凡例に使い方を記す。

## 7. 図版、表

- ・図版や表はなるべく言及している近くに置く。同じ頁か対向頁に組み込むのがベストだが（別ファイルの論文レイアウト見本参照）、巻末あるいは別冊にまとめることも可。
- ・いずれの場合にも、本文中と対応する図版・表番号、譜例番号などを付す。
- ・図版には作者名、作品名、制作年、材質技法、寸法、所蔵などの情報を付ける。図版の下にキャプションとして付けるのが望ましいが、煩瑣になる場合は、作者名と作品名に留め、他のデータは巻末の図版リストに回してもよい。一部データが不明な場合は未記載でも、やむを得ないものと見なす。

※論文が主としてひとりの芸術家に関わる内容の場合は、ほとんどの図版が同一作者のものとなるので、その作者名のみを省略することができる。ただしそのことは凡例に明記すること。

## 8. 外国人名の記し方

- ・初出のときは片仮名表記のあとに原則として原名のフルネームと生歿年を入れる。  
例) クロード・モネ (Claude Monet, 1840-1926)
- ・2度目以降は姓の片仮名綴りのみでよい。

## 9. 外国地名の記し方

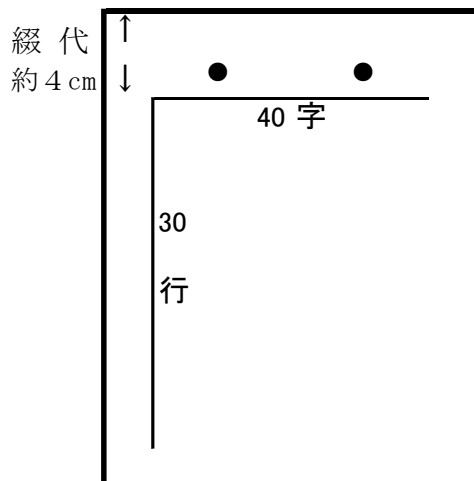
- ・ロンドン、パリのような慣用例に従う。特殊なものには原名綴りを併記する。

## 【別紙1】ワープロによる作成要項

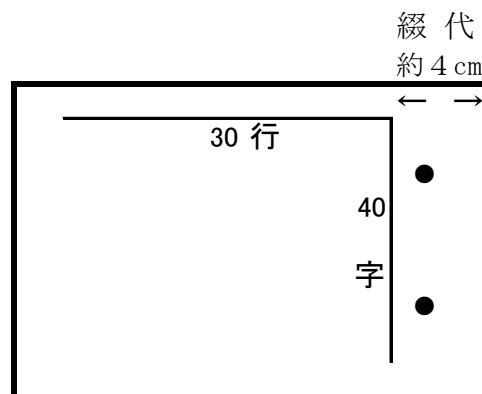
1. 縦書き、横書きともに可。
2. 用紙サイズはA4判とする（感熱紙は不可）。
3. 字数は1ページにつき、40字×30行とする。目次末尾に字詰めを註記する。
4. ワープロ変換違いによる誤字などは本人の責任とみなす。
5. 感熱紙での提出は不可。
6. 綴代を約4cm取ること。（図版にも綴代を忘れずにつけること）。他の余白は約2cm。

下の図および別ファイルの論文レイアウト見本参照（Web提出の場合、綴代を取る必要はない）。

### <横書きの場合>



### <縦書きの場合>



## 【別紙 2】 文献記載の手引き

註でも参考文献一覧でも、記載の原則は同じだが、目的に応じた以下のような変化がある。

- ・ 註では引用（参照）箇所をの頁数を入れる。参考文献一覧では、論文集の場合は参照した論文の、定期刊行物の場合は参照した記事や論文の、それぞれ最初と最後の頁数を入れる。
- ・ 欧米人の場合、註ではファーストネーム・ファミリーネームの順だが、参考文献一欄では、著者名のアルファベット順に並べるので、ファミリーネーム、ファーストネームの順になる。

### 【日本語の文献】

#### 1. 定期刊行物（雑誌・新聞）記事・論文の場合

著者名「記事・論文名」『雑誌名』巻号数（発行年月）、頁。

※新聞や一般雑誌の場合は発行本は不要だが、特に大学紀要については他大学で同じタイトルのものである場合もあるので発行母体を入れた方が丁寧。

※巻号以外に、通巻・通号がある場合があるが、ふつう省略する。

例 1. 高橋健一「ガブリエーレ・パレオッチェの『聖俗画像論』のために」『西洋美術研究』15号（2009年）、186-201頁。

例 2. 山下純照「野田秀樹の『ザ・ダイバー』にみる「演劇の修辞学」——能『海土』との関係性」『演劇学論叢』11号（2010年3月）大阪大学文学部演劇学研究室、56-70頁。

#### 2. 特集号全体の場合

「特集名」『雑誌名』巻号数（発行年月）必要に応じて頁数

例 1. 「特集 アルフォンス・ミュシャ —— 没後七〇年記念特集」『ユリイカ』41巻10号（2009年9月）。

同じ雑誌でも、その中の特定の記事や論文に言及する場合は以下ようになる。

例 2. 喜多崎親「ミュシャ《ジスモンダ》ビザンティン」『ユリイカ』（特集 アルフォンス・ミュシャ —— 没後七〇年記念特集）、41巻10号（2009年9月）、156頁。

#### 3. 書籍の場合

著者名「論文名または章立て等の見出し」必要に応じて編著者名（編著者が4名以上の場合は代表1名のみを記し、後は「他」）『書名』、出版地（出版地が東京の場合は省略）、出版社（「株式会社」などは不要）、必要に応じて（シリーズ名）、刊行年、必要に応じて頁数。なお全集名などが題名の一部になっているものもあるので注意。

例 1. 津上英輔『あじわいの構造 —— 感性化時代の美学』春秋社、2010年。

例 2. 相澤正彦『土佐光信』新潮社（新潮日本美術文庫2）1998年。

例 3. 木村建哉「孤児の映画、親子の映画 —— 相米慎二における性と生のドラマツルギー」木村建哉、中村秀之、藤井仁子編『甦る相米慎二』インスクリプト、2011年、102-131頁。

4. 翻訳書名・翻訳記事名の場合

原著者名『書名』（記事名の場合は「」）翻訳者名、（以下1～3に準じる）（原著者名原綴、原題、再版以降は版、出版地、出版社、刊行年）。

例1. リンダ・ノックリン『絵画の政治学』坂上桂子訳、みすず書房、1992年（Linda Nochlin, *The Politics of Vision*, London, Thames and Hudson Ltd., 1991.）。

例2. D. J. グラウト、C. V. パリスカ『新西洋音楽史』戸口幸策、津上英輔、寺西基之訳、音楽之友社、全3巻、1998-2001年（Donald Jay Grout and Claude V. Palisca, *A History of Western Music*, 5th ed., New York, W. W. Norton & Company, Inc., 1996.）。

5. 展覧会カタログの場合

『展覧会カタログ名』（展覧会カタログ）開催都市名、美術館・博物館名（館名に都市名が含まれている場合は館名のみで可。複数館の場合は／でつなぐ。三館以上の場合は、1館目のみを記し以降を「他」としてもよい）、開催年（複数に亘る場合は開始年-終了年）。

カタログに収録されている文章の場合、論文なら、著者氏名「論文名」『展覧会名』～以下同じ、

例1. 『ヴィクトリアン・ヌード』（展覧会カタログ）神戸市美術館／東京藝術大学美術館、2003年

例2. 岩佐光晴「初期一木彫の世界」『特別展 仏像 ― 一木にこめられた祈り』（展覧会カタログ）東京国立博物館、2006年、37-52頁。

6. 作品・作家解説なら、著者氏名「(展覧会番号) 作品名」(作品解説) 以下記事・論文と同じ。

全集の場合「図版解説」、展覧会の場合「作品解説」ということが多いが、どちらでもよい。

例1. 相澤正彦「瀟瀟八景図 相阿弥筆」(図版解説)、辻惟雄他編『日本美術全集 第13巻 雪舟とやまと絵屏風 南北朝・室町の美術Ⅱ』講談社、1993年、223頁。

例2. 喜多崎親「19 イアソン」(作品解説) 『ギュスターヴ・モロー』（展覧会カタログ）東京、国立西洋美術館／京都国立近代美術館、1995年、88頁。

7. ひとつの註に複数の文献名が並ぶときは；でつなぐ。

8. サブタイトルは論文内で統一した形式で示してよい。一般的には二倍ダッシュ（——）でつなぐ。

9. 同じ文献が註で再出する場合は、直前の註と同じなら、同前。他の註を挟むなら、著者姓、前掲書（論文なら前掲論文）。参照頁が異なる場合は頁数だけ足す。なお、同じ著書の複数の文献に複数回言及する場合には、前掲書（前掲論文）では区別がつかないので著者姓のあとに書名や論文名のみを繰り返す。書名や論文名が長い場合は省略形を用いてもいいが、その場合は初出時に（以下、○「○○」と省略）のように断る。

例1. 註1 赤塚健太郎「バロック音楽の演奏習慣に、舞踏身体のリズム特性を読む：不等音符奏法の場合」『美学』56号（2005年9月）、71頁。

註2 津上英輔『あじわいの構造 ― 感性化時代の美学』（以下『あじわいの構造』と略）

春秋社、2010年、100頁。

註3 赤塚、前掲論文、76頁。

註4 津上英輔「学びのもたらす解放 — アリストテレス『詩学』の「浄め（カタルシス）」『美学』49巻2号（1998年9月）、8頁。

註5 同上、104頁。

註6 津上『あじわいの構造』30頁。

## 【外国語の文献】

ここに記したのは、一般的な英語・ラテン語方式の最小限のものである。ドイツ語圏の慣習などはかなり異なるので、指導教員に確認すること。

### 1. 雑誌記事・論文の場合

著者名（複数の場合3人までなら記し、4人以上なら代表1人を挙げ et. al. をつける），“記事・論文名，” 雑誌名（イタリック体にできない場合は、下線），号数（発行年），頁。

各区切りに， を入れ . で結ぶ。文中， や . のあとは一字分空ける。頁の表記は、1頁なら p. 複数頁に亘るときは pp. とする。

例1. Joseph Hurley, "Toshiko Takaazu: Ceramics of Serenity," *American Craft*, Vol. 39, No. 5 (1981), pp. 2-22.

### 2. 書籍の場合

著者名（複数の場合3人までなら記し、4人以上なら代表1人を挙げ et. al. をつける），書名（イタリック体にできない場合は、下線），2版以降なら版，出版地，出版社，刊行年，必要に応じて頁数。

論文集の場合は、論文の著者名“論文名，” in 書名（イタリック体にできない場合は、下線），必要に応じて編者名（複数の場合3人までなら記し、4人以上なら代表1人を挙げ et. al. をつける）を記し（ed.）[複数なら（eds.）]をつける，出版地，出版社，刊行年，頁。

なお、アメリカの都市名の場合、州名も入れることがある（省略形が多い）。特に Cambridge のようにイギリスとアメリカに同じ都市名がある場合は必ず入れる。

例1. Barbara Stafford, *Body Criticism*, Cambridge, MA and London. MIT Press, 1993.

例2. Lloyd James Austin, "Mallarmé and the Visual Arts," in *French 19th Century Painting and Literature*, Ulrich Finke (ed.), Manchester, Manchester Univ. Press, 1972, pp. 232-257.

リプリントや第2版等を見た場合は、見た版の出版年を挙げ、あとに（ ）を付けて初版出版年を挙げる。

例1. Otto Demus, *Byzantine Mosaic Decoration*, London, Routledge & Kegan Paul, 1976 (1948). (1948年のリプリントが1976年)。

新しい版で内容に変更があることが明らかな場合には、版数を挙げ最新の版で引くのが原則。その



場合は初版年の表示は必要ない。歴史的な意味がある場合はもちろん初版等を用いる場合もある。

例 2. John Rewald, *The History of Impressionism*, New York, The Museum of Modern Art, 1973<sup>4</sup>.

John Rewald, *The History of Impressionism*, New York, The Museum of Modern Art, 4th revised edition, 1973.

### 3. 展覧会カタログの場合

著者名の代わりに *exh. cat.* を入れ、展覧会名、開催地、開催場所（複数の場合は / でつなぐ）、開催年、必要に応じて頁。

例 1. *Exh. cat., Hippolyte, Auguste et Paul Flandrin*, Paris, Musée du Luxembourg / Lyon, Musée des Beaux-Arts, 1984.

ただし展覧会カタログでも、研究者の著作物として刊行されている場合は書籍として表記する。

例 2. Weisberg, G. P., *The Realist Tradition*, Cleveland, Ohio, and Museum of Art, 1980.

なお、展覧会カタログに掲載された論文の場合、論文集と同じように、著者名、論文名のあと、in を付けて展覧会カタログ名を書く。

例 3. Malcolm Warner, "The Question of Faith: Orientalism, Christianity and Islam," in *Exh. cat., The Orientalists: Delacroix to Matisse. European Paintings in North Africa and the Near West*, London, Royal Academy of Arts, 1984, pp. 32-39.

### 4. コロン (:) タイトルとサブタイトルをつなぐ時に使う。

セミコロン (;) 複数の文献名を並べるときに使う。

### 5. 欧文論文特有の略号について（主要なもののみ）

- *ibid.* (同上、書籍でも記事や論文でも使える。頁も同じなら *ibid.* だけでよい)。

例 1. 註 3 Norma Field, *The Splendor of Longing in the Tale of Genji*, Princeton, New Jersey, Princeton Univ. Press, 1987. pp. 246-247.

註 4 *Ibid.*, p. 139.

- *op. cit.* (前掲、書籍でも記事や論文でも使える。頁も同じなら *op. cit.* だけでよい)

同じ著者の著作がひとつの場合。

例 1. 註 1 Wendy Kaplan, "The Vernacular in America, 1890-1920: Ideology and Design," *Art and the National Dream*, Dublin, Irish Academic Press, 1993. p. 53.

註 2 ~ 4 …… 略 ……

註 5 Kaplan, *op. cit.*, p. 65.

同じ著書の著作が複数ある場合、タイトルを残し、出版データのみを *op. cit.* とすることもある。

例 2. 註 1 Sigfried Giedion, *Architecture, You and Me: The Diary of a Development*, Mass., Harvard Univ. Press, 1958. pp. 180-182.

註 2 Sigfried Giedion, *Space, Time and Architecture: The Growth of a New Tradition*, 4th ed., Cambridge, Mass., Harvard Univ. Press, 1963. pp. 605-606.

註3～4 …… 略 ……

註5 Giedion, *Space, op. cit.*, p. 606.

註6～7 …… 略 ……

註8 Giedion, *Architecture, op. cit.*, p. 181.

#### 【ウェブサイトを参照した場合】

- ・ウェブサイトを参照した場合には、ウェブサイト名（『 』に入れる、欧文の場合はイタリックに）。
- ・もしあれば項目名やページ名（「 」に入れる、欧文の場合は“ ”に入れる）、URL、（最終）アクセス年月日を明記すること。（最終）アクセス年月日を明記するのは、ウェブサイトは内容が更新される可能性が常にあるためである。
- ・ウェブサイトに関しては『 』と「 」あるいはイタリックと“ ”の使い分けは必ずしも定着した習慣ではないので、個々の微妙なケースについては指導教員の指示に従うこと。

例1. 『日本映画データベース』(<http://www.jmdb.ne.jp/>)を参照（2006年12月19日（最終）アクセス）。

例2. 『『ごめん』公式サイト』(<http://www.shirous.com/gomen/>)より「ひこ・田中の ごめんができるまで」中の2001年10月21日付けの記述を参照（2006年12月19日（最終）アクセス）。

## 【別紙3】手書きによる作成要項

原稿用紙は一般的な形式に従って統一して用いること（これは横書きの例であるが、縦書きもこれに準ずる）。

### 1. タイトル、サブタイトル

- ・タイトルは4マス目から書く。
- ・サブタイトルは——をつけて書く。

例)

				フ	ァ	ン	・	ゴ	ッ	ホ	の	自	画	像					
				——		そ	の	意	味	と	展	開	——						

### 2. 各章の見出し

- ・2行目の3マス目から書く。本文との間に1行の余白をとる。
- ・章ごとに頁を改める。

例)

				第	1	章		ヌ	エ	ネ	ン	時	代									
				ゴ	ッ	ホ	は	、	彼	の	若	い	時	期	に	ヌ	エ	ネ	ン	に	行	き

### 3. 本文

#### (a) 改行について

- ・改行の場合は1字空けて書き出す。
- ・1つの段落内で余白をとったり改行したりしない。

#### (b) 引用の仕方

- ・直接引用のうち短いものはカッコ（「 」）を用いて改行せずに続ける。
- ・長いものは改行し、引用文の前後に1行分、左側（縦書きの場合は上側）に2マス分の余白をとる。

例) 長い引用の場合

ヴ	ァ	ザ	ー	リ	は	次	の	よ	う	に	述	べ	て	い	る	。			
			さ	て	、	半	分	ほ	ど	仕	上	る	と	、	教	皇	は	ミ	ケ
		ラ	ン	ジ	ェ	ロ	の	・	・	・	(	中	略	)	・	・	・	し	た

(c) 数字、アルファベットの書き方 (横書きの場合)

- ・ 数字：アラビア数字… 1マスに2字  
ローマ数字 (大文字) … 1マスに1字
- ・ アルファベット：原則として1マスに2字見当。活字体で明確に書くこと。

例)

19	84	年	、	I	、	II	、	III	、
----	----	---	---	---	---	----	---	-----	---

Re	mb	ra	nd	t		Ha	rm	en	sz	oo	n		va	n			Ri	jn
----	----	----	----	---	--	----	----	----	----	----	---	--	----	---	--	--	----	----

(d) 外国語の分綴

- ・ 引用の外国文が改行になる場合、その言語の辞書に示された分綴法に従い、行末にハイフン (-) を入れること。言語ごとに分綴法が異なるので、注意すること。

例) 英 …… beau-ti-ful  
独 …… kunst-ge-schicht-lich  
仏 …… im-pres-sion-nis-me  
伊 …… bi-blio-te-ca